

是に修理亮こそ扣へたれ、まばらがけすなど、追行勢を制し止るも過半せり、又勝家討取名を天下に揚んと、勇むも有て、ひたくと取巻し處に、勝介名乗けるは、天下に隱もなき鬼柴田と云れしは、吾なりとて、あたりを拂て突て出ければ、二町あまりはつとひらきにけり、かゝる處に、兄の毛受茂右衛門尉殿をしてありしが、此由を聞て、さらば弟と一所に討死せんと思ひ、向ひたる敵を追拂ひ來り、○中息をもさせず戦しか共、或手負或討れ、残りすくなに成にけり、勝介兄に向ひて、勝家退給ふて、一時に餘りぬべし、心安く退給ひなん、いざ心よく最期の合戦して、腹きらんと云まゝに、残りたる兵十餘人を引連突て出散々に相戦ひ追ちらし、其後兄弟腹をぞ切たりける、

〔鹽尻 四十一〕一、下總國小金の城主、酒井家の息、金三小田原没落の後、神君に仕へ奉りし、同國笛井の城主、原式部が息、童名吉丸十六歳の時より、神君に仕へ奉りし、京南伏見の御屋形、御造作の際、君不圖土木の場へ出させまし、けるよし、原御刀を持て著なりし故物をもはかで御供せし、酒井見て、己が草履を脱して、原にはかせし、君御覽まし、て、原が男色にめで、かゝるにやと思召ければ、汝いかで草履を脱て、彼に與へしと仰けるに、畏て、かれは古しへの主の筋目、臣はかの家<sub>カ</sub>に在る者の世忤にて候と、啓せしかば、君打うなづかせ給て、○中道道を忘れざる神妙也とて、御感ありしと云、

〔落穂集 前編九〕一、右十七日、○慶長五年六月の夜に入、鳥居元忠、被申上儀有之、御前○徳川家康へ出られ御用相濟候以後、今度當城見○伏見の御留守居人数少にて、一入苦身可致旨、仰有ければ、元忠被申上候は、

乍恐私儀は左様には、存不申候、今度會津御發向の儀は、御大切の儀にも有之候得ば、一騎一人も御人多に被召連可然奉、存候、然者彌次右衛門主殿助儀も、御共にめしつれられ、當城の儀は、私御本丸の御留守居を相勤、五左衛門など、外郭のべりをさへ申付候は、事濟可申様に奉、存候旨被申上候得ば、重て御意被遊候は、今度四人の面々を以、留守居と有之さへ、人少にて如何と思ふに、